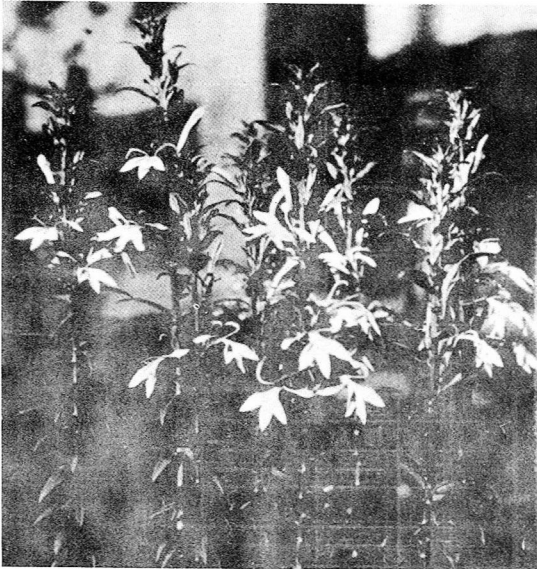


有毒植物 (7)

北大薬学部教授 三橋 博

サワギキョウ (キキョウ科)

北海道から九州にかけ湿地に群生する宿根草で花を除いて全体に無毛、根茎は太く短く横にはい、茎は分枝せず、直立し、高さ1mに達し中空で円柱形、葉は無柄で密に互生、皮針形で先が鋭く、へりに細かいきょ歯があり、光沢がある。夏から秋にかけて茎頂に総状花序を作り、短柄のある花を開き、花柄のつけ根に包葉がある。がくは鐘形、5裂の花冠はあざやかな紫色で長さ約3cm、唇形をなす。全草にアルカロイドを含み有毒である。また花壇のふちどりに用いられるロベリヤ(ルリチョウチョウ)は1年生の小草である。近縁のロベリヤ(インディアタバコ)は北米、カナダに原産し全草にアルカロイド(ロベリン類)を含み、これは塩酸ロベリン製造原料として重要である。塩酸ロベリンは呼吸麻痺に極めて有効である。



サワギキョウ

チョウジソウ (キョウチクトウ科)

北海道、本州、九州に分布、とくに河岸の原野にはえる多年草である。地下茎は横にはい、草高は5~60cm、茎は直立して円い。上の方で枝分かれし、葉は互生し、全緑、皮針形で両端はとがる。5月頃、茎の頂きに濃紫色の花を集散状に開く。がくは深く5裂、花冠の下部は筒となる。日本名は丁字草で花の形がチョウジに似た草であるのでいう。草全体に乳液を含みこれが有毒である。

アフリカ南部に野生するヨヒンベとよばれる常緑喬木があり樹皮は産地の土人により昔から性的衰弱に用いられていたが、この樹皮より塩酸ヨヒンピンが製造され、このものは皮膚、粘膜、ことに生殖器血管を拡張し、また脊髄腰薦部を刺戟する作用があり催淫の薬として用いられる。

チョウジソウにはこのヨヒンピンを含むことがしられた。



チョウジソウ

ミズカシワ (リンドウ科)

北海道をはじめ各地の山地の沼や沢に生ずる多年生水草でことに北海道の沼沢に多量に自生する。地下茎は肥厚して横走り、葉は長い柄があり卵状楕円形またはひし形状楕円形、葉質はやや厚く無柄である。夏に根出葉の間から高さ30cmの花茎を出し、頂きに6~9cmの総状花序を直立して白色の花を開く。ミズカシワの名は水中に生じ葉はカシワに似るの意味である。苦味質の成分(メリアチン)を含むが、漢方では催眠の効ありとしましたドイツでは解熱の効ありとしている。



ミズカシワ